岐阜大学
キャリア
センター
ニュース

Career Center News

No.8
2014.12

URL http://www1.gifu-u.ac.jp/~career/

巻頭言 キャリアセンターニュースに寄せて

江馬　諭
理事（教学・附属学校担当）
副学長

岐阜大学では，平成17年に教養教育のカリキュラム改革が行われ，授業「自分らしいキャリア設計」が開講されました。その後，平成22年４月に就職支援室がスタートし，平成23年４月「大学設置基準」の改訂と同時にキャリアセンターが設置されました。平成25年12月教育推進・学生支援機構の設置と伴に，センターの活動はキャリア支援部門に引き継がれました。現在では，全学共通教育の複合領域にキャリア形成分野が設けられ，10科目以上の授業が展開されております。これらは，多くの関係者のご尽力と授業担当者の活躍によって成し遂げられたものです。改めて皆様に感謝申し上げます。

さて，唐突としていますが，二つの記憶をここでご紹介します。昭和49年，卒業研究発表会だったと思います。ある先生がキャリアーについて質問されましたが，全く答えられませんでした。キャリアー（Carrier）とは交流増幅器の搬送波のことで，先生は「測定対象の周波数と増幅器の搬送周波数の関係を理解していないと，何を測定しているか分からなくなから，しっかり勉強しなさい。」と暗に指摘されていたのです。

昭和62年，イギリスの中部にあるバーミンガム大学で，留学生を対象とした英語の授業に参加していました。あるとき，イギリス人の教師が，「まもなく結婚し，彼の母国であるベネゼイラに行きます。そこでも教師の仕事を継続したいので，ボスに相談しています。」という趣旨のお話をされました。この話の中に，Job，Career，Recommendationという言葉が何回も出てきました。調べてみますと，欧米では新しい職場で仕事を得るために，現在の職場の上司の推薦が最も役に立ち，推薦状２通があれば確実に就職できることを知りました。

上記に引用したキャリアー（Carrier）とキャリア（Career）は，キャリー（Carry）という言葉から派生しているのではないでしょうか。キャリーには運ぶ，伝えるなどの意味があると辞書に書かれています。すなわち，弛まず同じ動作や作業を繰り返すということから，毎日仕事をする，仕事を継続するという意味に使われるようになったのではないでしょうか。仕事を繰り返すことがキャリーであり，その結果がキャリア（経歴）ではないでしょうか。

学生の皆さんには，上述のようなキャリアの語源に興味を持っていただき，キャリアセンターを十分活用して自らのキャリア形成を発展されることを期待しています。さらに，卒業後もキャリアの意味を時々思い出していただき，長い人生を歩んで下さい。

● 就職先企業の見方とキャリア形成ー「ブラック企業の見分け方」●

報告 平成26年度第１回キャリア支援部門ＦＤ

ＦＤ報告会の様子

キャリア支援部門第１回FDが，６月25日（水）に開催されました。講師には昨年『ブラック企業の見分け方』をwebにて公開した法政大学キャリアデザイン学部教授の上西充子先生をお招きし，近年社会的に注目されている「ブラック企業」問題に関連し，「就職先企業の見方とキャリア形成」をテーマとして，講演をいただきました。当日の参加者は教職員28名，学生29名，一般７名の計62名でした。

講演では就活を控えた学生を対象として，早期離職率の要因について，「やりたい仕事を選んでも離職を余儀なくされる大きな原因は労働条件」とし，企業の募集要項の見方の重要性について述べられたのち，インターネットのホームページや出版物を通して得られる関連情報を示して，その利用の仕方，考え方について説明されました。「日頃，インターネットやメディアを利用して情報を集めると自ずと見えてくる」「『白く見させようとしている』情報に注意」などと話されました。具体的な事例として，企業の求人票に表示されている「給与額」について，基本給とは別に「固定残業代」が含まれていることがあるなど，重要な雇用条件の見方について丁寧に説明されました。

講演後の質疑応答では，『ホワイト企業の見分け方は？』，『主体的に働いた結果オーバーする勤務時間と，強制される時間外労働の違いとは』，『企業全体ではなく，一部の係や部署がブラックであった場合もブラック企業というのか』など，教職員・学生問わず活発な質問がなされました。

終了後の感想文が35通寄せられ，求人情報などがネットを通じて大量に得られる環境にある中で，学生が自ら必要な情報を的確に判断する能力を身につけることの必要性など，就職支援やキャリア形成支援の課題が述べられていました。

● 女性の就職とキャリア形成 ●

報告 2014先輩社会人と在学生との交流会・報告

岐阜大学・先輩社会人と在学生との交流会が，今年度は「女性の就職とキャリア形成」をテーマとして，11月１日（土）に，地域科学部・第１会議室おいて開催されました。同交流会の開催は，岐阜大学キャリアセンターと男女共同参画推進室との共催，岐阜大学同窓会連合会の協力によって，今年で３回目になります。

報告いただいた先輩社会人５名（女性）の業種・職種および卒業学部・同年度は，県立試験場・研究職（1991年度，農学部），化粧品製造業・品質管理（1995年度，工学部），私立大学・ラーニングコーディネーター（2000年度，地域科学部），銀行・総合職（2000年度，地域科学部），セラミック製造販売業・技術職（2004年度，工学研究科）でした。当日の参加者は，学生13名，教職員19名など計43名でした。

討論会の様子

まず開催の趣旨について，座長より，岐阜大学の女子学生比率は現在37%と高まり，就職してからのキャリアアップと仕事の継続が望まれているが，学生アンケートによると，60%以上の学生が現実には性別格差があると認識し，出産・育児等を機に退職することもやむを得ないと考える学生が少なくないことがわかる。このような現実の中にあって女子先輩社会人がどのように自らのキャリアアップを図り，仕事を継続してきたのか。そしてそのための条件づくりには何が必要か，報告し討議したいと説明がありました。

報告・討議ではまず「男女共同参画の現状と課題」をテーマとして，松井真一特任教員（男女共同参画推進室）の報告がありました。女性の就業に関して，少子高齢化する社会のなかで期待が大きくなっていると同時に，仕事と家庭との両立を希望する女性が増加している。しかし，実際の女性の就業は，年齢階層別にみると「M字型カーブ」にみられるように，育児期の中断が多くみられる。また，育児後の再就業では，不安定な雇用形態が多くキャリア発展を阻害している。このような課題の解決のために，育休から仕事復帰への移行の課題を含め，両立のための男女の協力の在り方や社会的条件の整備など，課題が多いなどの指摘がありました。

続いて女子先輩社会人の報告では，結婚や育児をしても仕事を続けるには，就業の場に育児休暇制度とその適用という制度的な環境が整っているかどうかだけでなく，勤め続けるという本人の意志を明確に持ち表明すること，そして職場，家族など周りの人々の理解をえて支援しあう状況をつくることの重要性などが，それぞれの体験を踏まえて述べられました。育児休暇後の職場復帰に際しては，２年ほどの休職中のブランクをどう解決するかの課題も大きいこと，育児と両立させるために職種変更もあり得ることや，仕事との関係で計画的な出産・子育てへの配慮も必要など，具体的な留意点についても述べられました。また育児に関する家族関係については，育児や家事に関して「性別分業」の考えを超えて配偶者間の協働の理解，さらにそのためにも残業を当然とするような配偶者の「長時間労働」問題も解決する必要について述べられました。学生とのグループ討議で出された課題について先輩社会人からは，「就活では，就職してからも学びは必要であり，まずは自分のやりたいことを明確にして仕事を選ぶこと」，また「学生時代のさまざまな学びや体験，その広さと深さが社会に出てから活かされてくること」，さらに「一人で頑張りすぎず周りの人たちとの協力関係が大事であり，そのような人と人との関係づくりが大事」などのコメントがありました。

そして，学生が就活時にはなかなか知りえない企業等の実情と情報について，さらに女性が社会・企業でキャリアアップを図っていくために必要なことの理解などについて，先輩社会人との交流の意義が確認され，今後もこのような交流会を続けていくことの意義が確認されました。

● キャリア形成の自主的活動 ●

報告 「自分の身は自分で守る」を目指して

加納 一輝
岐阜大学学生保安消防隊 隊長

1. はじめに

東日本大震災が起きてから４年が経とうとしています。メディアでは震災をテーマとした番組が放送されていますが，受け手である私たちは十分な対策を講じているでしょうか。私たちの願いは，自然災害などの緊急時に「自分の身は自分で守る」ことが出来る人を一人でも増やすことです。その願いの下，今年度も活動を行ってきました。

2. 活動報告

学内での活動　学内では，主に学生を対象として防災・防犯意識の啓発を目的として活動をしています。日常的な活動では，毎週２回日没後に防犯パトロールを行っています。隊員たちでどこが危ないかを調べた場所を中心に，行き交う人に挨拶をしながらパトロールをしています。パトロールを行うことで犯罪発生を抑止できること以外に，パトロールをする私たちを学生の皆さんが見て，自分たちが守られているという安心感や，防犯への関心を持つきっかけを与えていけたらと思っています。そのほかには人工心肺蘇生，消火器の使用方法，防災知識などを，避難訓練や岐大祭のブース運営で伝える活動を行いました。これからの社会を担う岐大生の皆さんに，一人でも多く救命活動や消火活動を行う力がつくように，どうしていけばいいかを考え啓発活動を続けていきたいと考えています。

岐大祭での出展

学外での活動　学外では，私たちの知識を一層深いものにするための強化合宿や，外部からの依頼や自主参加によって地域の防災訓練やイベントへの参加があります。強化合宿では地震や火災に対する知識の強化を目的として，富山県の四季防災館へ行きました。そしてこの合宿や，自主勉強会で得た知識を防災訓練やイベントで参加者の方に伝えていくことができています。その活動の一つとして，11月23日の「まるごと環境フェア」では，環境という視点から，災害時に新聞紙やダンボールで作れるグッズ作製ブースを出しました。「こんなもので作れるんだ。」「これがあると助かるよね。」など，参加者の方にもご好評をいただきました。私たちも，参加をすることで新しく知識を得ることができ，また私たちが地域貢献できる貴重な機会であるので，これからも積極的に企画や参加をしていきたいと考えています。

3. 基盤的能力の形成と関わって

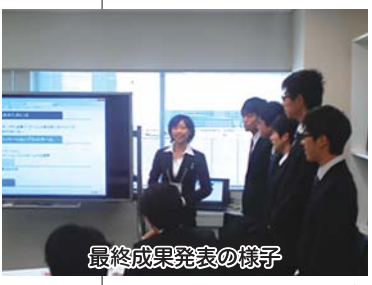
私はこの団体に入って，挑戦する機会が増えたと感じます。企画を進めるために自分とは異なる年齢のか関係者の方々に電話をしたりあってお話をしたりする，自分たちが何をしたいかを考え，話し合い，役割を分担して行動をする，企画に来て下さる参加者の方々にどうすれば伝わるかを考えて，演示の方法を工夫し，実行していく。その経験は私にとってとても有益な経験で，そこで得た知識や技術は今の自分の糧となり，学生保安消防隊以外の活動でも生かすことが出来ています。私が社会人になったときでも，その時の私を助けてくれるでしょう。特にこの一年はミーティングの場を増やし，話し合いを深めていきました。その中で隊員が自分の意見を明らかにし，どんな点が課題でどんなコンセプトで企画をしたいかなど様々な視点から話し合うことができるようになりました。積極的に意見を言い合う姿からその話し合いを進める力が成長できた団体となったと考えられます。

最後になりますが，平素より学生保安消防隊の活動を支えていただいている皆様，本当にありがとうございます。これからも学生保安隊という立場から，より良い岐阜大学を目指し，隊員全員で考えながら進んでいきます。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

● 平成25年度岐阜大学長期インターンシッププログラム（GULIP）受講学生寄稿 ●

GULIP体験を振り返って

谷藤 倫子
GULIP１期生アイガチーム
地域科学部４年


最終成果発表の様子

GULIPに参加して意識が変わったのは大きく分けて，コミュニケーションに意識を向けるようになったこと，プレゼンテーションのノウハウを学び，自分の見せ方を見直すことになったこと，就職活動と合わせて，働いていらっしゃる方の視点を学べたことの三点である。

最も認識が改まったことは，メンバー全員が一つの課題に対し意見を反映させていくことの難しさである。コミュニケーションが取れないことが最初の壁となった自分たちのチームは，意見を出せる雰囲気を作ることに最も注意を払っていた。チームの中で自分だけが話をしていても大した成果は得られない。環境が整えば情報がおのずと共有され，自分が探せなかった知識も増える。話しやすい環境を作りそれぞれの意見を聞く姿勢を身につけることで，課題に対して向ける姿勢がチームで統一出来ることを学んだ。

次はプレゼンテーションに関する知識が増えたことと経験を積んだことである。自分が伝えたい事を簡潔に一貫させ，それをどのように話せば伝わるのか考えることが課題となり，何度も練習を重ねて改善した。今まで経験の乏しかったプレゼンテーションをインターンという緊張する場面で挑戦することで自信が得られ，就職活動のワークショップの中でもプレゼンテーターを自ら進んで引き受けることもあった。

最後は，就職活動と合わせて，働いていらっしゃる方の視点を学べたことである。インターンシップは実際に社会で働く方々からご指摘いただける貴重な機会でもある。例えば，企業の方にグループの課題の進捗を送るメール，直接会うためのアポイントメントから当日のセッティングまで，頂いた貴重な時間で何の話を進めたいのか。学生にはない緊張感を知る経験を積める機会となった。その際，日本の企業の持つ強みや課題について拝聴したことで，日本の企業に対して自分の視点をもって就職活動に臨むことが出来た。

以上の３点以外にも，この半期を通して学んだことは沢山ある。右往左往しながらも時間を使って自分を追い込み作業に打ち込めたことは，就職活動だけではなく今後の人生においての価値観を変えただろう。力不足を情けなく思った経験も含め，自分の強みも見つけることのできる濃厚な半期であった。学生をシビアにそしてあたたかく見守ってくださる方々のもとで課題に取り組むGULIPが，この先も多くの学生にとって飛躍の場となることを願う。

最後に，自分たちのミーティングやプレゼンテーションをあたたかく見守って下さった株式会社アイガの坂井社長，山本さま，吉田さまや，岐阜大学キャリアセンターの廣瀬准教授，渡邊さまを初めとした岐阜大学のGULIP関係者の職員である皆さま，そして，一緒に知恵を絞ってくれた，アイガメンバーおよびGULIP一期生の皆さまに感謝申し上げます。

● 先輩社会人寄稿 一私はこう生きてきた●

見果てぬ夢 音楽とともに

大塚 頼明
教育学部ACT支援室
教育指導員

大塚先生

はじめに

教師が児童生徒の教育を通してどのように社会と歩んでいるかについては，この文を読んでくださる皆さんには，ほぼお分かりのことでしょう。それで，私が幼いときから親しんできた音楽のことを教育，そして社会と結んで書かせていただきます。

私は教育学部を卒業して定年退職までの38年間，岐阜県の教員として歩みました。その後，非常勤の教育指導員として，教師の道を志す人たちと歩んで８年目になります。

１．管弦楽団で実感した個と集団の関係

私は国語が専門ですが，キリスト教会の牧師であった父が早くからピアノを習わせてくれ，幼いときから音楽が好きでした。そうしたこともあって，学生時代，岐阜大学管弦楽団に入り，トランペットを吹いていました。ご存じのように管弦楽団はたくさんの楽器で構成されています。私なりに個と全体の望ましい関係を管弦楽団の演奏活動を通して考え，次のことを手にしました。

メンバーそれぞれが懸命に練習して音色，技倆を磨き，それぞれの楽器の最高の音を提供しあうとき，オーケストラはオーケストラとして最高の音楽を奏でる

この考えを，小学校，中学校での授業や学級経営に活かそうとしました。個々の持ち味に磨きをかけることと学級の高まりをできるだけ学級の成員の目に見える形で実現することを目指したのです。いつも完全燃焼・願いを達成，というわけにはいかず，反省しきりです。それでも，教え子たちとの同窓会で「このクラスは，夏休みなんかなければいいのにと本気で思うほど毎日が楽しくて，いつもみんなと一緒にいたいと思っていました。」との言葉に出会うこともあり，宝物にしています。私の手柄ではなく，クラスのメンバー全員のハーモニーですね。

２．先輩の言葉　　楽観的向上論

トランペットをたどたどと練習していた私に先輩が話してくれました。自分を下手だ，下手だと思いながら練習していても上達しない。確かに下手だけれど←（優しいけれど厳しいのです）こう思うといい。「今の自分もなかなかのものだ。けれど，正しい練習を熱心に積み重ねたら　もっともっと自分は素晴らしくなる。」…これは大切な教えと受けとめ，「楽観的向上論」と名付けて，児童生徒にもこの言葉を伝えてきました。楽器の練習だけでなく，広く生かせる教えだと今も大事にしています。

３．優れた芸術家との出会い

文化庁が芸術鑑賞教室という事業を推進していて，小編成のアンサンブル，クラシックバレーなどを児童生徒と鑑賞する機会がありました。その一つが海外でも活躍しておられるヴァイオリニストの鈴木秀太郎さんとピアニストのキューバ生まれのセイダ夫人との演奏会です。宮城道雄さんの名曲「春の海」をセイダ夫人が弾き始める前にごく短時間，目を閉じて瞑想されたのですが，そのとき譜面をめくる役で傍らにいた私の耳に一瞬，波の音が聴こえたのです。近くに小川もなく，セイダ夫人がイメージした春の海の波音が私の耳に届いたとしか説明のしようがない経験でした。文字を覚えつつある幼児がたどたどと文字を音声化するのと同じようなレベルが私のピアノ演奏であるとすれば，優れた演奏家や，朗読家は，楽曲や文章に魂を吹き込んで世に送り出していると言えましょうか。今も心が震えるような出会いでした。どんなに研鑽を積んでも及ばないだろうけれど，いつかは到達したい見果てぬ夢を目指す力を与えていただきました。

４．音楽療法士への道

特別支援教育の前身である特殊教育の講義の第一声で，柚木馥先生は，こう語られました。

「人間を人間たらしめるのが教育であるとすれば，特殊教育は正にその原点に位置するものであります。」

情熱あふれる講義に触発され，大学の卒業時に私は，養護学校教諭普通一級の免許状を手にしていました。(その番号が岐阜県第一号であることは私の記念の一つです。名実共に，という自信はもちろんありませんけれど。)

その縁もあって，定年退職後，障がいのある方々の自立支援施設から，音楽療法の講師依頼を受けました。月に一度の実践を引き受けたのですが，きちんと音楽療法を学びたいと，岐阜県音楽療法研究所の講座に通い，３年後に認定証，さらに３年間の実践検討会での学びを経て認定証の更新をすることが出来ました。

現在，介護予防教室，そして特別養護老人ホームなどで，音楽活動の時間を受け持たせていただくことがあります。私と介護福祉士である家内の二人で担当するのですが，健康の維持・増進のために行うことですから，参加する方々に説得力を持って語るには私たち自身が健康であることが必要となります。それで，腹八分目の食事　←（私の場合，やや，遅まきですが）・ラジオ体操・ウオーキング・ピアノなどの楽器・音楽療法のセミナーなどへの参加を心がけています。時間の長短はともかく，楽器の練習を積み重ねるか怠けるかは，すぐに外へ表れてきます。音楽療法に携わることが自らの健康生活の原動力・励みになるのは，本当に感謝なことです。

介護予防教室に参加された方から「楽しかったです。寿命が10年延びました。」などと声をかけていただくと，私たちのほうこそ，すてきなお言葉をありがとうございますという思いになります。

結びに

岐阜県交響楽団の活動を通して，「交響詩　長良川」の初演時に，この曲を作曲された團伊玖磨さん，詩を書かれた江間章子さんにお目にかかることが出来ました。また，音楽療法の学びでは百歳を越えてなお現役の日野原重明医師の講演や，アメリカの病院で活躍しておられる音楽療法士のお話を聞くことも出来ました。趣味として親しんできた音楽がこのような道に通じているとは，若い日には思いもよらないことでした。ささやかな体験ですが，春秋に富む皆さんが思いを汲んでくだされば，幸いです。

キャリアセンターニュース編集委員
委員長　佐々木 実（キャリア支援部門長）　委員　今井　健（キャリア支援部門副部門長）
委　員　酒光 伸嘉（課長補佐・就職支援室長）　委員　籔田　薫（キャリア支援部門参事補）

●岐阜大学教育推進・学生支援機構キャリア支援部門●
〒501-1193 岐阜市柳戸1－1
キャリアセンター TEL 058-293-3393 career@gifu-u.ac.jp
就職支援室 TEL 058-293-2147・3362 job@gifu-u.ac.jp